

食物経口負荷試験

定義

食物経口負荷試験(oral food challenge, OFC)はアレルギーが疑われる食品を単回または複数回に分けて摂取させて症状の有無を確認する検査である。

食物アレルギー診療ガイドライン2016

目的

「食物アレルギーの確定診断(原因アレルゲンの同定)」、「安全摂取可能量の決定および耐性獲得の診断」の2つに分類される。

1) 食物アレルギーの確定診断(原因アレルゲンの同定)

- 感作されているが未摂取の食物の診断
- 即時型反応を起こした原因として疑われる食物の診断
- 食物アレルギーの関与を疑うアトピー性皮膚炎の病型での確定診断(除去試験に引き続き行なう)

2) 安全摂取可能量の決定および耐性獲得の診断

- 安全摂取可能量の決定(少量～中等量)
- 耐性獲得の確認(日常摂取量)

食物アレルギー診療ガイドライン2016

リスク評価

重篤な症状を誘発しやすい要因は以下の通りである。

1) 食物摂取に関連した病歴

- アナフィラキシー、アナフィラキシーショック、呼吸器症状など重篤な症状の既往
- 重篤な誘発症状を経験してからの期間が短い
- 微量での誘発症状の既往

2) 食物の種類

- 牛乳、小麦、ピーナッツ、ソバなどは重篤な症状を来しやすい

3) 免疫学的検査

- 特異的IgE抗体価高値

4) 基礎疾患・合併症

- 喘息
- 喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎の増悪時
- 心疾患、呼吸器疾患、精神疾患などの基礎疾患

食物アレルギー診療ガイドライン2016

方法

- 食物摂取に関連した誘発症状の詳細な病歴、基礎疾患、合併症、免疫学的検査データを参考にリスクを評価し、適切な総負荷量、実施時期および方法を決定する。
- 少量で症状が誘発される可能性があるようなハイリスク例の場合は少量(low dose)を目標量とした食物経口負荷試験を行い、それが陰性であれば中等量(medium dose)や日常摂取量の食物経口負荷試験(full dose)に進むステップを設定するとよい。
- 食物経口負荷試験で症状がない場合やはっきりしない場合は、負荷後数回にわたり再現性を確認する。
- 食物経口負荷試験では、アナフィラキシーなど、重篤な症状が誘発される可能性があり、文書による説明と同意の下、緊急対応が可能な体制を整備して実施する。
- 耐性獲得の判断のための負荷試験は、できるだけ低年齢から施行し、食べられる食品を増やしたり、早期に除去解除ができるように計画する。
- 負荷試験結果に基づき具体的に食べられる食品を示し、生活の質の改善につとめる。

食物アレルギー診療ガイドライン2016

結果判定

- **陽性の判断:** 食物経口負荷試験で摂取直後から数時間までに明らかな症状が誘発された場合に陽性と判定する。遅延型反応もあるため、翌日以降も症状の有無を観察するように指導し、その結果を加味して最終的に判定する。
- **判定保留の判断:** 軽微な症状は主観的な症状の場合には、判定保留として再度の食物経口負荷試験または、自宅での反復摂取による症状の再現性を加味して最終的に判定する。
Miura T, et al. *Pediatr Allergy Immunol* 2018; 29: 66-71.
- **陰性の判断:** 食物経口負荷試験で症状が誘発されず、その後自宅での反復摂取により、確実に摂取できることを確認し、最終的に陰性と判定する。

食物アレルギー診療ガイドライン2016